経堂聖書会の皆さま

先回の「たより」をお届けしてから、一週間がたちました。いかがお過ごしでしたでしょう。

この間、北沢さんの求めに応じて、何人もの方が近況メールをお送りくださいました。そのなかで、山口和彦さんは看護師の方の情報を、佐野光郎さんはゴリラ博士の見解を添えてくださいました。佐野さん、奥様の看病、しっかりお願いいたします。吉田咲さんには、月本の誕生日を「暴露」されてしまいました。

さて、先回、「八王子たより（1)」にご紹介しました「リュートを奏でる囚人」の絵画ですが、18 世紀末の作品にしては古風に過ぎないか、と薄々感じていました。すると、古代オリエント博物館研究員の津本英利さんがその出典を詳しく調べてくれました。

その結果、先便でお送りした絵は、じつは、17 世紀前半に中部欧州で普及した書物『80 の新徳目寓喩（Octaginta Emblemate Moralia Nova)』に掲載された銅版画の一つ（右図）を、18 世紀末に、描き直した作品であったことがわかりました。早速、木村護郎クリストフさんにもお知らせいたしました。

絵画のほうは、銅版画の説明として記されたラテン語 Spes et Patientia Vincunt「希望と忍耐は勝利する」を絵のなかに書き込んだのですね。もとになった書物の作者は、ルター派の神学者でマールブルク大学教授であったダニエル・クラマー（1568-1637)、刊行は 1630 年でした。

この前の頁にはロマ書 12:12 が引用され、それに続いて「このことが、希望を生み出し、私は自由にリュートを奏でうる。囚われていようとも、私は絶望することなく、ことにあたる」とドイツ語、フランス語、イタリア語の三つの言語で記されていました。

この頁の最上段にも「希望をもって喜び、苦難に耐え」というロマ 12：12 の一部が引用。その下に例の言葉「希望と忍耐は勝利する」が大きく印刷され、最

下段には「身体が囚われようとも、われは精神において自由なり、痛みと喜び、そこにて希望ある信仰の錨が私を強くす」とラテン語で綴られています。

1630 年といえば、時あたかも、「三十年戦争」のさなか。「三十年戦争」は、カトリックとプロテスタントの宗教戦争といった様相を呈し、全欧州を巻き込んだのです。そのような時期、神学者は信仰者の生きるべき姿をひろく伝えようとしたのでしょうか。

「三十年戦争」では、ドイツの森の大半が伐採され、森林消滅の危機に見舞われたといいます。ドイツ人が森を大切にするのは、そうした体験があったからだ、と留学中に聞いたことがあります。ドイツの森林局は多くの森の樹木を一本ごとに登録している、とも。

留学中の私も、日曜日は午前中の礼拝が終わると、私に息子以上の世話をしてくれたフランク夫妻の家で昼食をいただき（たいていはジャガイモが主食、肉料理が一品、それにサラダ）、一時間ほど午睡をとり、さらにコーヒーとケーキをいただいた後、きまって二時間ほど、夫妻と一緒に森を歩きました。それから 40 年の歳月がたち、30 年ほど前に夫を見送った夫人は、この３月に 97 歳の誕生日を迎えました。いまなお元気で、時々、電話で消息を伝え合っています。昨日は、受話器の向こうで、ドイツ語でローズンゲン（Losungen）と呼ぶ『日ごとの聖句冊子』からコロサイ書 1:23 の前半を読んで聞かせてくれました。あとはドイツでも大変なコロナウィルスの話。

キンランから一週間遅れで、ギンランも咲きました。写真は積もる落ち葉の間から顔をのぞかせた一株。背丈は 15 ㎝ほど、キンランの三分の一以下。この隣に咲いたギンランは、背丈がわずか 5 ㎝の、たいそう貧弱な小株で、写真に撮るのが可哀そうなほどでした。キンランと比べ、ギンランのほうがもとより華奢なのですが、今年はいつもより元気がありません。原因は、脇に立つクヌギの幹が伐採されていましたので、その根につく根菌が十分でなくなったせいであろう、と想像しました。今年は、それでも、枯葉のなかから芽を出し、けなげに咲いてくれたのです。来年は、この場所からギンランは絶えてしまうでしょう。しかし、林の別の場所にもギンランは花を咲かせていますので、心配はしていません。

花の話題をもう一つ。例年、この季節に楽しみにしている散歩コースが近くに

あります。色とりどりのツツジが咲く裏通りです。今年も綺麗に咲いてくれました、誰も命令しないのに（写真）。

ツツジといえば、二つのエピソードが思い出されます。

一つは、大学生になった 1967 年の今時分（つまり半世紀以上も前）に読んだ、在日の作家・金達寿の名作『玄界灘』の冒頭部分に記されていたエピソードです。作者の分身である主人公は、新聞記者になるための試験で、「躑躅」を読んでみよ、と言われて、ツツジと読めず、合格できなかった。半世紀以上も前に読んだ小説のこんなエピソードが、なぜか、記憶にとどめられました。金達寿は芥川賞候補にもなった小説家ですが、1970 年ころから『日本における朝鮮文化』というシリーズを出し続け、大きな反響を呼びました。今年 1 月、101 歳で他界。

もう一つは、矢内原忠雄が東大総長に選出された際、キャンパスに花がないのは寂しいし、学生が可哀そうだ、と考えて、ツツジを植えさせた、というエピソード。本郷キャンパスの、本郷通り沿いの塀の内側には、かつて、ツツジがずうっと並んで植えられていました。東大の駒場キャンパスにもツツジの植え込みがありましたが、こちらも矢内原の発案だったでしょうか。内村鑑三が花はオダマキを好んだように、矢内原はツツジが好きだったのですね。かつてツツジが咲いていた場所に、いまでは、新しい施設がところ狭しと立ち並んでいます。それを寂しいと感じる人もいなくなりました。

月本昭男記（2020.5.4）